平芳裕子（著）
『まなざしの装置―ファッションと近代アメリカ―』
2018 年　青土社　A5 判　249 頁　定価（本体 2,600 円＋税）

新實　五穂*

ファッションは女性の特権で、専売特許なのだろうか。なぜそのように考えられ、見なされるのか。本書は、19 世紀前期から 20 世紀半ばまでのアメリカを事例に、この問題に果敢に挑んだ内容になっている。それは、ファッション雑誌（版画・型紙含む）や商店のショーウィンドウ、ミュージアムのディスプレイを通して、アメリカ女性をめぐる言説やイメージがどのように形作られてきたかを歴史的に分析する試みである。そして女性とファッションの関係性が構築されていく歩みは、「飾る女性」・「縫う女性」・「模る女性」・「巡る女性」と称され、四部構成の内容からなっている。プロテスタントが色濃い東部アメリカで着飾ることが女性全体に正当化されていく仕組みを、さらには衣服の生産体系の変化に合わせて女性たちの中にも階層化がおき、お針子という職業や家庭内での裁縫仕事に女性たちが対峙する際の服飾流行との連関を、最終的には女性たちの服飾流行が都市の視覚装置の中に落とし込まれる過程を、本書を読み進める中で理解することができる。

また近現代における服飾の歴史と言えば、フランスのパリ一辺倒で、著名なデザイナーの創作活動および芸術的な作品を描写するきらいがあることに本書は一石を投じ、女性の服装はそのデザインにおいて身体の自由と機能性を獲得するためだけに存在してきたとする解釈に疑義を呈している。パリを中心とするものの見方ではなく、アメリカ独自の固有性や地域性の存在を解明する必要性を述べ、全ての女性たちがデザイナーによる服を例外なく身に着けていた訳ではないことを重要視する。それゆえ、本書の対象はアメリカであり、未だファッションデザイナーやブランドが存在していない 19 世紀前期からの時代に着目している。さらにヨーロッパの服飾の歴史を語る際、たびたび用いられる経済学者ソースティン・ヴェブレンの著作『有閑階級の理論』（1899 年）がアメリカを考察対象としている理論であり、前提であることが見落とされていることを指摘している箇所は実に的を射ている。一方で、これまでの服飾の歴史研究が服装様式の変遷だけを知る目的のためだけに存在しているという認識をはじめ、取り上げられる従来の研究から新規のものが抜け落ちており、本書の意義を強く打ち出すために都合よく従来の研究が使用されてしまっている点、およびアメリカでの服飾史の研究に関する紹介が「はじめに」では不十分なため、本書が日本国内でのアメリカ研究に限って意義があるとする点は残念な部分である。しかしながら、服飾研究は学際的な学問分野であり、アメリカの市井の女性を対象とした研究は未開拓な史実を呼び起こす可能性が高く、本書は多方面にわたる学術的な貢献を期待できる内容を備えている。

「飾る女性」と称された第 1 章では、19 世紀前期にフィラデルフィアで刊行された女性誌『ゴーディズ・レディズ・ブック』とその前身の『レディズ・ブック』を用いて、女性が自身を飾り立て、装飾する行為と女性が家庭内を整え、室内を飾る仕事とが結びつく様子を垣間見ることができる。ファッション誌が発達していない、禁欲的なプロテスタント精神に支えられた社会では、着飾ることが家庭的な夫人が行う良き振る舞いと位置付けられ、家庭人としてのレディの嗜みと見なされることで、女性の着衣行為として許容されていく。換言するならば、ヨーロッパの服飾流行を甘受していたかのように評されるアメリカ社会において、自国向けファッションの形成の裏側には、家庭人としての理想的な女性像の創出が不可欠であった。流行りの社交場でヨーロッパの最新流行を華麗にまとうレディではなく、家庭という場で内面にも通じる慎み深い装いをしたレディが雑誌に付されたファッション・プレート（服飾版画）にも描き出された。

* お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系　准教授

つまり妻であり母であり女主人であるレディのあるべき姿を、良き作法を習得するための術を知るためのものが、女性誌の記事や版画であった。

「縫う女性」と称された第 2 章では、身体を装飾することが可能になった女性たちの中で、19 世紀半ばの衣服産業の発展に伴い、変化が生じる。着飾る立場の者とそれを支える縫う立場の者とが社会で可視的に存在するようになり、女性たちの内部構造が階層化していく様子を裁縫仕事に従事するお針子の表象を主に取り上げ、論じている。ただし、お針子は一概に下層階級の労働者とは言えず、父親や夫の不在および事業の失敗などで中流階級以上の女性が不運にも豊かな財産を失った際、女性が体面を保ちながら、女性性を逸脱しない範囲で独力によって生きていくことが可能な職業の一つであったとされる。このことも関係してか、お針子や家庭の裁縫仕事の図像が 19 世紀中期の『ゴーディズ・レディズ・ブック』には頻繁に掲載され、お針子の労苦や状況を読者自身の問題として引き受けるように教化する。そして女性に必須の価値ある仕事としての裁縫は､家庭人であるレディにとって理想的な振る舞いであることが強調される。労働者としてのお針子と家庭裁縫をする主婦とを結節する内容の誌面。それは同誌の読者層が拡大し、中流階級の読者層を上手く取り入れるためにも必要な戦略であったことを理解できる。

「模る女性」と称された第 3 章では、家庭内で裁縫や服作りが日常的に行われる中、布地を裁断するための型（パターン）の普及を通して、最新のパリでの服飾流行が女性たちにどのように受容されていったかについて詳らかにされる。19 世紀後期のアメリカにおいて、中流階級の女性たちが上流階級と同様に装うための手段として、自身での服作りに重きが置かれ、女性誌やファッション誌にはパターンが付録となり、人気を集めたと言われる。中でも、アメリカ初のファッション誌と目される『ハーパース・バザー』では、誌面の記事から最新流行や服を作るための知識や技術を習得し、広告で服作りの道具や材料を扱う店の情報を入手して、パターンで服を仕立てるための実際の手段を獲得することができる仕組みになっていた。家庭裁縫で雑誌に付されたパターンを利用することによって、パリの服飾流行、とくにオートクチュール（高級注文服）のデザインを女性たちは自身のスタイルとして手繰り寄せ、服を仕立てることで流行に追随し、模倣する行為を身につけた。

「巡る女性」と称された第 4 章では、20 世紀前半のアメリカに新しく登場したメディアである商店のショーウィンドウとミュージアムの展覧会に注目し、いかにして女性たちは対象化された自身を眼差したのかという背景が語られる。前者のショーウィンドウはマネキンや展示器具、照明装置の開発、専門的職業「ディスプレイマン」の育成などの影響で、ディスプレイは劇的な舞台となり、そこで着飾る女性の姿を客観的に見つめる訓練を女性たちは経験するようになる。また後者のファッション展は、衣服産業の支援や業界の人材育成の目的で行われたものの、民族衣装に由来したアメリカ独自の装いが正統化され、展示される際、そこに欠かせない要素が理想的な女性像の存在であったとされる。ミュージアムの中で女性たちは服飾展示（作品）と出会うことで、社会に求められ、要請される理想的な女性像を目の当たりにし、19 世紀より繰り返され、再現される家庭人としてのレディの姿を刷り込まれる。視覚的な装置の歴史を通じて、女性たちがファッションを見る行為には社会的・文化的意味があることの一端が明らかにされる。

結果的に本書は、ファッションは女性の特権なのかという冒頭の問いに対して答えを提示している。それは、理想的な女性像を構築する過程で、ファッションと女性とが関係を結び、ファッションが女性の領域に留まることをアメリカ社会が欲望したとするものである。階級社会から市民社会へと推移し、家族単位の性差に立脚する社会構造によって、男女を二分する価値観や規範が必要とされたという結論はいささか簡潔である印象はする。けれども、ヨーロッパの服飾流行を盲目的に受け入れ、それに付き従ってきたかのように見なされてきたアメリカ服飾の歴史において、家庭人としての理想的な女性の姿を探求する必要性があることを浮き彫りにするとともに、アメリカ女性の表象を複眼的に分析することが、服飾の歴史を知るための意義深い作業であることを本書は教えてくれている。